

おもしろ にいがた学



新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てリターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビューの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「新潟のしめ縄」

「神社の参道、真ん中は神様の通り道だから、端を歩くのがマナーである」と、ある神主さんから聞いてびっくりしました。「神事は堂々と遂行第一！」と真ん中を、しかも大手を振って歩いていた私は、今までなんと失礼なことをしていただいましょうか。「そんげこと常識ら！」と御叱りを受けそうです。しかし、隅っこをコソコソと歩くというのは、今一つめでたさに欠けるような気がします。そこで、真ん中よりやや端っこを厳かに進んでいた際、気が付いたことがあります。

それは、神社にある「しめ縄」、この形がさまざまである、ということです。試しにお近くの神棚、もしくは神社をご覧ください。どんな形をしていますか？

「片方が太くて、もう一方が細い形」（これを人は大根締めという）、「前者より全体に細い」（これを人はごぼう締めという）、「両端が細くて、真ん中が太い形」（これを筆者は真ん中太締めという）、「一本どーんと同じ太さ」（これを筆者は一本綱締めという）と、しめ縄は形も太さも色々です。気になりだしたら止まらない、いちがいがき私の私は、「出先で神社に立ち寄り」、「人に聞く」という二大調査を行いました。その結果、驚くことが判明しました。新潟県はしめ縄の形がさまざま、「しめ縄王国」ということが。全国でも神社の数が多いことで知られる本県は、しめ縄も全国的に多様で特徴がありました。

とくに、阿賀北方面（新発田、旧豊栄の一部）は、両端が上部でくると輪になった形の全国でも珍しいタイプです（これを筆者はメガネ締めという）。旧小出町では、中央がぼんと膨らみ太くなったしめ縄の上から、さらにしめ縄を縦に乘せて下部

で留めた不思議な形を発見、こちら全国では類のない形です（これを人は法螺締めという）。全体が大きなホラ貝に似ています。なかには、棒状で片方が蛇が口を開けたような一本縄の形もありました。神主さんか氏子の方に聞いたかったのですが、不在で連絡先も判明せず、しかし、これはまたこれでも有難いものでありました。

ところで、ここでは「しめ縄」と表記しましたが、実際「標縄」「注連縄」「締め縄」「メ縄」「七五三縄」と表記もさまざまです。万葉の時代に高貴な人々しか立ち入れなかった地の標（しるし）として存在した「標縄」、悪霊が入らぬよう水を注いで作った縄が連なる「注連縄」、縄を締めた（めた）「締め縄」「メ縄」、縄の比率が7:5:3で垂れ紙が下がる「七五三縄」と、どれも納得できる標記です。家にある神棚のしめ縄をよくよく見れば、神棚に向かって右から七、五、三の割合という発見が！そうか、右半分が七、左半分が五と三で八、だから掛けるとき左に傾いてしまったのか！

この七五三タイプは、新潟県では一般的に「大黒締め」ともいわれ、これまた、めでたい名称です。偶然、新潟県立万代島美術館で目にした江戸時代末期の新潟を描いた「新潟年中行事絵巻」、描かれたしめ縄は「大根締め」の七五三型でした。大根と大黒の発音が似ているのも気になります。「ダイコン」が「ダイコク」に変わったのかもしれない。ああ、今年は誰に頼まれたわけでないのに「しめ縄調査の年」になりそうです。ということで、今年もよろしくお願いいたします！

